

タイで初の海外生産

三陽機器 トラクター用作業機

農業機械メーカーの三陽機器（岡山県里庄町）が、初の海外生産拠点をタイに開設し、トラクター向け作業機の製造販売を始めた。隣国のラオスやカンボジアなどへの輸出も目指しており、農業の機械化が急速に進むアジア市場をにらみ事業展開。5年後には30億円の売り上げを見込む。

首都バンコクの南東約80キロに位置するチョンブリ県に昨年11月、100%出資の現地法人を設立し、従業員62人を雇用。同県の工業

団地内にある建物（敷地面積4660平方メートル、鉄骨2階延べ1800平方メートル）を賃借し、工場は今年11月上旬から本格稼働。現在は

自社工場を構えた。総投資額は約2億円。

現在、水田や農地の整理に使う作業機を主に製造している。年内に1500台、2010年は1万5千〜2万台を生産する予定。ほかに産業機械用の油圧シリンダーを手掛ける。

トラクター前部に装着し、

当社は同じ工業団地に進出している大手農業メーカー・クボタ（大阪市）と連携して同国内で販売する。将来的

には自社販売網を開拓し、カンボジアやラオス、インドにも輸出。数年後には、主力製品の油圧式積み込み装置「フロントローダー」も生産する計画。現地から日本への製品出荷はしない。

日本国内の農機市場は農家の担い手不足などで縮小傾向だが、アジア諸国では今後、農業の機械化が見込めるという。農業用トラクターの需要も高まっており、クボタは今年3月から現地で生産を開始。三陽機器は、トラクター向け作業機の需要も拡大するとみて進出を決断した。

寺前公平社長は「日本ではトラクターの出荷が減少しており、作業機の伸びも期待できない。近い将来、現地法人の売り上げが本社を上回るだろう」と話している。（木村俊雄）



三陽機器がタイに開設し、トラクター向け作業機を製造する工場

